



セルゲイ・プロコフィエフの音楽の暗号と芸術性 — 《ピアノ・ソナタ》におけるラインとコードのア ナグラム—

木本, 麻希子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2020-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6563号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006563>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏名 木本 麻希子
専攻 人間表現専攻
指導教員氏名 大田 美佐子 准教授
論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

セルゲイ・プロコフィエフの音楽の暗号と芸術性
—《ピアノ・ソナタ》におけるラインとコードのアナグラム—

論文要旨

本研究は、20世紀のロシアを代表する作曲家のひとりであるセルゲイ・セルゲーエヴィチ・プロコフィエフ Прокофьев, Сергей Сергеевич (1891-1953) の《ピアノ・ソナタ》を分析研究対象とした。自伝において提唱された音楽的理念に基づき、分析理論的な視座から作曲家独自の創作過程を検証し、音楽の暗号による楽曲構造の統一性について考察を行った。作曲家の独創的な音楽表現の具体化を美学上および技法上の双方の観点から読み解くことによって、《ピアノ・ソナタ》の演奏解釈の可能性を提示した。

序章では、本研究の分析概要と検証方法を提示し、考察上の基盤となる作曲家の著作および同時代人の回想記録を概観した。主に、1900年代から1950年代にかけての作曲家自身による二つの自伝、日記、1950年代から1970年代にかけてのロシアの作曲家による回想記録を扱った。作曲家の自伝および日記をもとに、《ピアノ・ソナタ》の着想から創作に至るまでの経緯、創作時の状況、作曲家の音楽観、初演から批評に関する証言について整理した。回想記録については、同時代のロシアの作曲家であるD. ショスタコーヴィチ (1906-1975)、D. カバレフスキー (1904-1987)、K. カラーエフ (1918-1982)、A. レーマン (1915-1998) による著述を扱った。同時代の作曲家からみた当時のプロコフィエフの音楽の在り方、楽曲が与えたインパクト、プロコフィエフの人生観などについて検証し、創作理念と音楽表現との関連性を提示した。

第一章では、自伝において、作曲家の創作上のポリシーとして提唱されたFive Linesについて、音楽的理念、作曲技法、ピアノ演奏法という三つの観点から《ピアノ・ソナタ》における音楽表現の具体化について考察した。第一章の前半では、20世紀の作曲家と音楽論の関係性について論考した。同時代における他芸術との比較考察の一例として、ロシアのアレクサンドル・ロトチェンコ (1891-1956) が提唱した「線主義 (リニイズム)」の問題を取り上げた。Five Linesと「線主義 (リニイズム)」は、芸術上の共時性にとどまらない。同時期における「構成主義」とも関わりながら、両者にとって、「線 (ライン)」というものが芸術作品の「構成原理」であることを明示した。第一章の後半では、Five Linesの各ラインの用語上の語源的定義と音楽における基本的概念について考察したあと、《ピアノ・ソナタ》における分析的例証を行った。第一の「古典的ライン」、第二の「現代的ライン」、第三の「トッカータ/モーターのライン」、第四の「抒情的ライン」、第五の「スケルツォのライン」について、主題動機、和声、

(氏名 木本 麻希子, No. 1)

リズムの各側面から音楽表現の具体化を明示した。Five Linesの全体の音楽的傾向について考察するため、各々のラインの組み合わせの種類について検討した。自伝における作曲家の音の組み合わせに関する証言とともに、Five Linesのひとつの解釈方法を提示した。

第二章では、《ピアノ・ソナタ》における形式構造の分析と作曲家の息子が呼称したProkofievizeという独自の創作プロセスの問題を扱った。第二章の前半では、既往研究の分析結果とともに、楽曲構成、テクスチュア、旋律、調性、和音、リズム、拍子における音楽的特徴の独自性について考察した。ピアノ演奏法については、急速楽章と緩徐楽章における奏法的特徴を整理した。第二章の後半では、プロコフィエフの独自の創作プロセスであるProkofievizeについて、後世の研究者による仮説的な定義とともに、具体的な作曲技法を検証した。《ピアノ・ソナタ》からProkofievizeの代表的な分析例として、転調、調号変更、オクターブ転置、Wrong Noteを取り上げた。Prokofievizeによる技法とピアノ演奏法が結合した具体例を提示した。

第三章では、《ピアノ・ソナタ》における音楽の暗号の一例として、Morse Codeのコード略号の特定と音型分析を行った。第三章の前半では、作曲家の証言から《ピアノ・ソナタ》と暗号的要素の関連性について考察した。Morse Codeの歴史と符号の概要とともに、音楽におけるコード略号とサインの解説について論考した。第三章の後半では、コード略号の特定とそれらのサインとしての意味と解釈の可能性について提起した。Morse Codeのコード略号には、「アルファベット (A~Z)」「数字 (0~9)」「マーク」がある。《ピアノ・ソナタ》におけるコード略号とサインを特定するにあたり、「戦争」に関連する英単語に基づくコード略号の検証、符号の構成要素への細分化、特定されたサインの音型分析という三段階の考察プロセスによって、分類を試みた。Morse Codeは、長点 (—) と短点 (・) による二つの符号によって構成されているが、「符号 (長短点)」と対応する「音価」の抽出については、楽譜上の「記譜された音価」と演奏上の「知覚上の音価」という両方の観点から検証した。「符号 (長短点)」と「音価」の対応関係があったものすべてを対象にしたうえで、主題動機、和声、リズムに関する音型の基本分析を行った。複数のアルファベットの組み合わせによる「アナグラム」のサインについては、《ピアノ・ソナタ》や第二次世界大戦に関連する用語から特定し、同様に音型分析を行った。

第四章では、Morse Codeの音型分析による表現形態の特徴と傾向の考察結果を提示した。第四章の前半では、第6番Op. 82、第7番Op. 83、第8番Op. 84の各楽章におけるサインの存在と意味の解釈を提示し、楽章内における応用範囲、各楽章間、各ソナタ間の応用について考察した。「アルファベット」「数字」「マーク」に基づく各サインの主題動機、和声、リズムにおける音楽的特徴の分析から、楽曲構造における統一性について俯瞰した。暗号的な「アナグラム」を持つ可能性があるサインの解釈も提示した。第四章の後半では、プロコフィエフのMorse Codeとの比較分析として、同時代のロシアの作曲家であるD. ショスタコーヴィチの《交響曲》第7番Op. 60「レニングラード」第四楽章 (1941) およびR. シCHEDリン《二つのポリフォニックな小品》より「パッサ・オスティナート」 (1932) を取り上げた。作曲家によってMorse Codeの音楽的な位置付けと表現形態が異なることを実証的に提示した。ショスタコーヴィチのサインは、一種の「効果音の楽音化」であり、シCHEDリンのサインは、ピアノにおける信号音の「再現」として表現されていた。一方、プロコフィエフのMorse Codeについては、Five LinesやProkofievizeという独自の技法とともに高次に暗号化されたものであり、一部のサインがアナグラムであることを明示した。

(氏名 木本 麻希子, No. 2)

第五章では、《ピアノ・ソナタ》におけるMorse Codeの全体的な分析結果を提示した。各々のサインの提示範囲、音域、ダイナミクス、アーティキュレーション、奏法的特徴の傾向を提示した。《ピアノ・ソナタ》における各サインの表現形態がすべて異なる傾向を持ち、多様性に富むという結論を示した。「アナグラム」の音型は、提示された楽章内で楽曲構造とともに「シンメトリー構造」を形成していた。分析結果より、プロコフィエフの《ピアノ・ソナタ》第6番Op. 82、第7番Op. 83、第8番Op. 84の三つのソナタは、Morse Codeに基づく主題動機による構造上の統一性によって、《戦争ソナタ》三部作として音楽的に結びつくものであることを提示した。

プロコフィエフの《ピアノ・ソナタ》は、Five Lines, Prokofievize, Morse Codeという三つのアイデアの交差から、音楽的理念、作曲技法、ピアノ演奏法の全領域において、作曲者の独創的な音楽表現として結実していた。本研究では、これら三つのアイデアの技法上のシステムが「暗号的要素」を持ち、作曲家特有の高度な作曲技法を提示していると結論づけた。

(氏名 木本 麻希子 , No. 3)

論文審査の結果の要旨

氏名	木本 麻希子		
論文題目	セルゲイ・プロコフィエフの音楽の暗号と芸術性 — 《ピアノ・ソナタ》におけるラインとコードのアナグラム—		
判定	合格 不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	准教授	大田 美佐子
	副査	教授	佐々木 倫子
	副査	教授	梅宮 弘光
	副査	准教授	田村 文生
	副査	国際文化研究科 准教授	楯岡 求美
要 旨			
<p>本研究は、20世紀のロシアを代表する作曲家のひとり、セルゲイ・セルゲエヴィチ・プロコフィエフ（1891-1953）の《ピアノ・ソナタ》について、自伝において提唱された音楽的理念、作曲家独自の創作過程を検証し、「音楽の暗号」による楽曲構造の統一性について、理念、技法、奏法の各視点から考察を行ったものである。論文は序章と5章から構成される。</p> <p>序章では、問題意識を明らかにし、分析の概要と検証方法を提示し、考察の基盤となる作曲家の著作および同時代人の回想記録などを概観した。</p> <p>第一章では、作曲家の創作上のポリシーとして自伝のなかで提唱されたFive Linesについて、音楽的理念、作曲技法、ピアノ演奏法という三つの観点から、《ピアノ・ソナタ》における音楽表現の具体化について考察している。</p> <p>第二章では、《ピアノ・ソナタ》における形式構造の分析と作曲者の息子が呼称したProkofievizeという独自の創作プロセスの問題を扱った。《ピアノ・ソナタ》からProkofievizeの代表的な分析例として、転調、調号変更、オクターブ転置、Wrong Noteを取り上げた。</p>			

第三章では、《ピアノ・ソナタ》における音楽の暗号の一例として、Morse Codeのコード略号の特定と音型分析を行った。《ピアノ・ソナタ》におけるコード略号とサインを特定するにあたり、「戦争」に関連する英単語に基づくコード略号の検証、符号の構成要素への細分化、特定されたサインの音型分析という三段階の考察プロセスによって、分類を試みた。

第四章では、Morse Codeの音型分析による表現形態の特徴と傾向の考察結果を提示した。比較分析として、同時代のロシアの作曲家であるD. ショスタコーヴィチの《交響曲》第7番Op. 60「レニングラード」第四楽章（1941）およびR. シチュエドリッ《二つのポリフォニックな小品》より「パッサ・オスティナート」（1961）を取り上げ、プロコフィエフの表現におけるMorse Codeの音楽的な位置付けとは表現形態およびその意味付けが異なることを実証的に提示した。

第五章では、《ピアノ・ソナタ》におけるMorse Codeの全体的な分析結果を提示した。各々のサインの提示範囲、音域、ダイナミクス、アーティキュレーション、奏法の特徴の傾向を提示した。《ピアノ・ソナタ》における各サインの表現形態がすべて異なる傾向を持ち、多様性に富むという結論を示した。

最後に、プロコフィエフの《ピアノ・ソナタ》におけるFive Lines, Prokofievize, Morse Codeという三つのアイデアの交差は、音楽的理念、作曲技法、ピアノ演奏法的全領域において、作曲者の独創的な音楽表現として結実していた。本研究ではこれら三つのアイデアの技法上のシステムが「暗号的要素」を持ち、作曲家特有の高度な作曲技法を提示するものであると結論づけた。

本研究の背景には、職人氣質的に編み出されていったプロコフィエフの創作の美学が、膨大な情報量にあっても的確に捉えられてこなかった経緯がある。その意義は、《ピアノ・ソナタ》を対象として、プロコフィエフの創作の美学を音楽的理念、作曲技法、ピアノ演奏法という三つの観点から整理した点。また、モルス・コードを単なる「サイン」としてだけでなく、詳細な楽曲分析を通じて、そこに「作品創作の基盤」となる美学的な意義を見出した点にある。また、戦争や移住などによる、創作環境の劇的な変化と創作の美学との深い関係性を示唆している。今後、本論文の考察は、受容理論を含めて、作品の多様な解釈の存在と理解、および作曲家像の新たな地平を切り開いていく契機になると考えられる。本審査委員会は、学位申請者の博士(学術)学位を得る資格があると認める。なお学位申請者は、本論文に関わるレフェリー付きの論文を2本、レフェリーなしの論文を2本発表し、国内学会発表を4回行っている。博士(学術)学位申請の要件を充足している。

- 1) 木本麻希子「S. プロコフィエフの《ピアノ・ソナタ》におけるポリティクス — 「5つのライン」のマニフェスト —」、『ロシア・東欧研究』; ロシア・東欧学会編, 2015年
- 2) 木本麻希子「S. プロコフィエフ《ピアノ・ソナタ》におけるWrong Notes — 「5つのライン」のスケルツォ的要素 —」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻 第1号, 2013年